

ああ、ロマン・ロラン

——わたしの学生時代——

今 江 祥 智

そのお嬢さんを見たとき、なんや知らんけどナツカシイ顔やと思った。勤め先の大学の入試面接会場でのことである。それも道理、あとで分ったことだが、そのお嬢さんは、わたしが学生時代に下宿していた家の美少女の娘さん、つまり、美少女は今や母親になり、こちらもそれだけ歳を重ねたということだった。

その下宿は上賀茂に近く、そこから大学へは歩いて通った。講義のない日は逆上賀茂神社へ歩いて、広い境内の芝生で何時間も寝ころんで本を読んだり、友だちとだべったりした。自動車などまだすこぶる少い、のんびりした頃で良かった。

すぐ近くに一人の上級生の家があり、少し

下ると新村出先生のお宅があり、この二軒へもよく通った。上級生は松居直で、今は福音館書店の社長である。出先生宅へは、猛先生に会うためにでかけた。この二人と出会ったことが、わたしの人生の方向を決めたようなものだった。そして二人とも、ロマン・ロランを通して出会えた。ああ、ロマン・ロラン大明神といったところである。

もっとも、ロマン・ロランの本を神棚にあげ、柏手を打ったからそうだったわけではなく、こちらが不敵にもロマン・ロラン研究会なるものをつくって、うろうろしたことが機縁である。ちょうど平和講演会とかが行われ、羽仁五郎センセと清水幾太郎センセ

の講演が栄光館で開かれた。その折に、小机をもちだし、「同志」の石田順一クンと語らって研究会員募集のポスターを貼った。

最初に入会を申込みきた背広の、一見講師風なのが松居直上級生であり、やがて研究会の顧問をお願いしたのが、当時同志社の講師だった新村先生だった。

研究会は毎週開いた。講義より熱をあげたというべきか。会員も増え、はてはロマン・ロラン展まで聞く始末と相成った。講義の方はかなり以上にサボリ、サボリの効かない児玉実用センセエの時間などは、秀才の秋山健や一瀬昌夫を楯に、ひっそりと坐っていた。それでも、教室でもよりも図書館の椅子に坐っていた時間の方が長かった気がする。渡辺一夫の名訳によるラブレエの『ガルガンチュワとパンタグリユエル』の部厚いのを、何度も借りつぎをして愛読した。英文科のくせに、久保センセエの軽妙なフランス語の授業や、新村先生のフランス文学史（二年になってもまだ十七世紀までしか進まなかった）、桑原武夫講師の「ルソー研究」（ルソーのことはそっちのけで、ハーバード・リードやジョン・デューイ、ケネス・パークラの文芸批



評についての話がべらぼうに面白くてタメになった）は熱心に受講した。おしまいには批評ゼミをとり、人数が少ないために英書講読をサボれず辞書との首っぴきに泣かされた。戸川センセは勿論、訳本のない、すこぶる厄介なやつをテキストに使うイジワルおじさんだった。しかし、卒業近く、ゼミ一同を祇園の料亭に連れて行ってごちそうして下さった。そのときが、酒の初体験だ——といくら言っても只今の友人どもは誰一人として本気にしてくれない。戸川センセエ、証言して下さい。何にせよ、あまり出来の良い学生ではなかったので卒論にはおおいに悩まされた。新村先生がフィールディングの全集をあげようとおっしゃって下さったので、大胆無謀にも、

それにキメたと申上げたら、太田センセエにお目玉をくらった。フィールディング希望者が多すぎるとやんわり断わられたのだが、本音は、この出来ない学生に歯がたつ相手ではないと見抜いておられたにちがいない。

ほなら、ロバート・ネイサンにしますと申上げた。『今ひとたびの春』や『ジュニーの肖像』『司祭の妻』といった珍らしい大人のファンタジーが好きで、アメリカ文化センターから借りて読んでいた。すると、児玉センセエから、そんなマイナーはあかんアと注意を受けた。

ほならしゃあない、当時訳本『クレエ』が出たのを読み面白かったハーバート・リードにしますと申上げると、児玉センセエはにんまりほえまされた。先生がリードの愛読者と知らなかったところは、とにかくやっとうOKがでたので、こおどりして丸善に走り、いざ注文する段になってリードの著作の多さにたまげ、そいつが到着してそのいちいちが大部で難解なのになんざりした。訳書は先のともう一冊『平和のための教育』の（英文科卒論用にはたいして役にたたない）二冊しかなかった。

とにもかくにもでっちあげ（引用の多かったことノ）友人の和田祐一さん（語学の達人である）にタイプしてもらった。三個所マチガイがあり、ユニークという言葉が三度も使われてあったア……と仰言ったが、今思えば冷汗ものである。どうしてあんなに語学のできる人にたのんだのだろう。この人には、やはりロマン・ロランの原書講読をお願いした縁で知りあえたのだったから、これもロマン・ロランのせいにしておくか。

卒論面接のときは、大量引用した箇所を訳しなさいと命じられて、また冷汗を流したが、なんとか卒業させてもらった。

それにしても、デモにでかけて機動隊に追いたてられ、御所を駆け抜け、今出川通りの線路をとぶように横切り、大学へ走りこんだら、そこまでは追っかけてこなかったから、まだノドヤカナ時代であったというべきか。

元・英文科、やがて中学の英語教師になるわたしは、目下、娘の英語の宿題につきあわされて、当時のサボリの罰を充分に受けている……。

（昭和二十九年大学英文学科卒業
聖母学院短期大学教授、児童文学作家）